



第13回 失われた獣たち 南アメリカの奇妙な獣

「孤立した大陸と適応放散」

オーストラリア大陸が、有袋類の宝庫だということは有名ですね。彼ら有袋類は大きな胎児を妊娠せず、未熟な仔を産み落とし、お腹の袋の中で育てるという独特の哺乳類で、ほぼオーストラリア大陸だけに住んでいます。かつては世界中に彼らの祖先が生活していたようです。しかし、大陸移動で南極大陸からオーストラリア大陸が離れて北上し、オーストラリア大陸が孤立すると、結果的にこの大陸は彼ら有袋類の「箱舟」となったのです。他の大陸の有袋類は、オポッサムのようなわずかな例外を除いて、絶滅してしまいました。私たちを含む有胎盤類との競争に敗れたようです。

しかしオーストラリア大陸で孤立した有袋類は、様々な姿かたちに適応放散し、他の大陸に負けない多様性を獲得しました。カンガルーはウシやウマに当たる存在。木から木へと滑空するフクロモモンガ、他にフクロモグラ、フクロネコ、フクロオオカミ、フクロライオン等々。

こんなことは、この世でただ1回しか起きない奇跡でしょうか？

「もうひとつの奇跡？ 南米大陸」

南米大陸は3000万年ほど前に南極大陸から離れ、数百万年前まではオーストラリア同様孤立した大陸でした。孤立前から住み着いていた原始的哺乳類からは、現在では絶滅しているものの、やがて他の大陸に負けない多様性を誇る、奇妙な動物たちが生み出されたのです。

彼らの主なグループ名を挙げてみると「南蹄類」、「滑距類」、「輝獣類」、「火獣類」となります。そんな哺乳類たちをご存知ですか？

「南蹄類」

南蹄類は、南米の蹄のある獣という意味で、ウサギのようなティポテリウム、ノスティロプスから、まるでカバのような大型のトクソドンまで、まるでオーストラリアの有袋類のように、南米で多様化したグループです。

最後に現れたメソテリウムは、ネズミのような前歯だけでなく、臼歯も一生伸び続けるようになっていて、植物食の動物としては理想的な歯を持っていました。

「滑距類」

彼らは旧世界のウマやラクダのような動物に発展しましたが、滑距類はもちろん南米独自の動物で、ウマやラクダとは無縁です。なかでも有名なのは「マクラウケニア」で、三本の指で立ち、遠目にはコブの無いラクダのようですが、彼らの鼻先にはゾウの鼻を小さくしたような細長い鼻が付いていました。滑距類には、ウマのように中指一本で走る仲間も現れました。

「火獣類・輝獣類」

火獣類としてはピロテリウムが比較的有名です。サイほどの大きさ（3mぐらい）の大型植物食動物で、やや長い鼻が発達し、上下の顎から突き出す牙もありました。だからなんとなくゾウに見えなくもないのです。でもゾウとは縁の遠い動物で、南米でゾウに似た暮らしをしていたせいで、身体が似てしまったようなのです。火山性の地層から化石が発掘されたことから、「火獣類」なんて名付けられましたが、きっと歯や脚の指の形状からは、グループ名を考えるのが難しかったのかも。火を吐くわけではないんです。

輝獣類というのも変わった名前ですが、アストラポテリウムが代表で、ピロテリウムに少し似た感じの、原始的なゾウのような姿です。「輝獣」とは、「稲妻のように吠える獣」という意味のようですが、割と豪快な命名ですね。

ピロテリウムやアストラポテリウムがもっと発展していたら、ゾウそっくりな姿になっていたでしょうか？

「その他の南米独自の動物」

上に書いた動物のほかにも、全長5mを超えるオオナマケモノの仲間もいました。彼らの大きさも圧巻なのですが、最も驚かされるのは、その立ち上がり方です。彼らの後ろ足は、なんと足首が内側に90度曲がった、足の裏が向かい合うような構造で、その巨体を、後ろ足の小指〜かかどにかけての外側の面で支えているのです。マネをすると捻挫しそうな姿勢ですが、これが彼らの自然な姿でした。化石骨を復元した人々は、さぞや驚いたことでしょう。

もうひとつが「ティラコスミルス」。二本の大きな牙を持つサーベルタイガーそっくりですが、実は有袋類。数百万年前に生息していましたが、北米と地続きになる時代に、消えてしまいました。彼らは北米からやって来たサーベルタイガーと出会ったのでしょうか？

「下がって行く海面 北米との交流」

やがて地球に寒冷な時期が訪れ、海面が下がると、南米は北米と地続きになりました。すると双方の大陸の交流が始まります。南米特有の動物たちが北米から進入した優れた哺乳類に一方的に駆逐されたと言うより、事情はもっと複雑で、オオナマケモノの仲間が北米に侵入したり、複雑な交流があったようなのです。

南米特産の多くの動物たちが、結果的には絶滅してしまいましたが、もしも仮に、地球の環境変化の方向や時期が偶然少しずれていたら、結果は違っていたかもしれません。南米の動物たちが、もしも圧勝していたら？ いまごろ北米には、バッファローの代わりにマクラウケニアやトクソドンが、ピューマやオオカミではなくティラコスミルスが君臨し、森にはオオナマケモノやピロテリウムが闊歩していたかも。

いやいや、更にベーリング海峡を渡り、アジアにまでやって来たら？ 現在とはまったく異なる世界が広がっていたかもしれません。もちろん私たちは、それを受け入れ、影響を受けて暮らしているはずです。

水墨画にはティラコスミルスが描かれ、動物園には人気者の、竹を食べる白黒のオオナマケモノがいたりして。